

1. はじめに

今回採択していただいた基金によって、フランスでのフィールドワークを行うことができた。調査は2014年11月末日から2週間にわたって行い、ボルドーのイスラーム教徒（ムスリム）を中心にインタビューを行うことで、今後の研究に繋がる大変有意義な知見が得られた。

2. 研究概要

本研究では、ヨーロッパの中で最多のムスリム人口を有するフランスにおいて、ホスト社会とムスリム達のそれぞれが望む共生のあり方を明らかにするとともに、摩擦が生じる原因を特定しそれを解消するために必要な方策を検討する。

2.1 今回のフィールドワークの目的

ボルドーに住むムスリム移民やその子孫の側から話を聞き、現地で暮らすマイノリティの側が考える共生のあり方を明らかにする。

フィールドとしてボルドーを挙げた理由は、以下の通りである：

- マイノリティ・ムスリムのイスラーム法学（イスラームが国教とされているもしくはマジョリティの信じる宗教となっている国や地域でのイスラーム法学とは異なり、マイノリティとなっている国や地域の事情に合わせたイスラームのあり方や法学を考えること）の提唱者、もしくはその一人として有名なターリク・ウーブルー氏がボルドーのイマームを務めており、イスラーム的知見から現地のコミュニティの人々に示唆を与えている可能性が高く、そのような中で人々がどうイスラームを実践しているかを調べるため。
- ワインの名産地として知られるボルドーにおいて「ムスリムが飲食物や産業としてハラームであるワインにどう向き合っているのか」といった象徴的な事柄をはじめ、データを集めるため。
- ZEP（教育優先地域）に指定されており、その性質からして移民が多いとされるため。

2.2 分析手法

- 文献調査
先行研究の整理（フランスにおける移民の社会統合、外国人排斥運動、マイノリティ・ムスリムのイスラーム法学、今回フィールドワークで購入した各種文献）
- 各種資料
政府機関、シンクタンク、新聞、現地調査（ボルドーを始めとするフランスの諸地域）でのインタビュー等の一次資料

3. 今回のフィールドワーク概要

3.1 期間：2014年11月30日～12月15日

3.2 使用言語：フランス語、アラビヤ語

3.3 日程：

- 11月30日 成田空港発、アブダビ空港トランジット、パリへ
12月1日 パリ空港到着15時、パリ中心にある宿に到着18時半、バシール・アル＝アビーディー氏（アラビヤ語教育者養成団体アル・マルサドのリーディングメンバー）およびチュニジア人学生と夕食（ハラール肉を使ったトルコケバブレストラン）
12月2日 ノートルダム大聖堂など見学、パリ郊外にある日本人の友人宅で宿泊
12月3日 午前中はパリ日本人学校見学、午後はパリモスクでアスルとマグリブ礼拝後、バシール・アル＝アビーディー氏のお宅に宿泊（その子供達に対しアラビヤ語でまたアラビヤ語について調査）
12月4日 午前中は本屋で文献探し、午後はパリ→ボルドーをTGVで移動、以後10日朝までSi Mohamed氏のお宅に宿泊
12月5日（金） Mosquée de Cenonで金曜礼拝、イマームのMahmoud Doua氏インタビュー
12月6日 午前中はハラール中華食料品店でSi Mohamed氏と買い物、午後はMosquée el Houda (Association des Musulmans de la Gironde)にて16時～17時半のコーラン勉強会（アル・ガーシャ章の暗記）、18時～20時はMosquée de Cenonにて若者のためのイスラーム勉強会（イマームのMahmoud Doua氏の講義と質疑応答）
12月7日 休憩、日本とメールのやりとり等、文献読解
12月8日 携帯電話購入、通訳の仕事、Mosquée el Houdaでインタビュー（ワビ氏、モハメド氏）
12月9日 Mosquée el Houdaでインタビュー（イドリース氏、アブドゥンヌール氏）
12月10日 Mosquée el Houdaやその周辺でインタビュー（フサイン氏）
12月11日 Mosquée el Houdaやその周辺でインタビュー（カーセム氏）、盲目のムハンマド氏との出会い
12月12日（金） 文献購入、Mosquée de Pessacで金曜礼拝、アスルとマグリブはそれぞれ別の小さなモスクで礼拝、ラバーハ氏とスフィアン氏のお宅で宿泊
12月13日 午前中にボルドー→パリを移動、パリ郊外にある日本人の友人宅で宿泊
12月14日 午前パリ空港発、アブダビ空港トランジット
12月15日 成田空港到着

3.4 調査方法：

- ・午後Mosquée el Houddaに留まり、ムスリムにインタビュー。
(なおこのモスクではズフルからマグリブにかけては失業中のムスリムがほとんどで、マグリブ礼拝とイシャアの合同礼拝の間が一般的に「社会統合されている」可能性の高いムスリムが集まった)
- ・インタビュー（共通の質問にまず答えてもらい、インタビューイの話も取り入れながら質問事項を修正する形式をとった）
 - ・共通質問事項は以下の通り：
 - ・名前、年齢、移民何世か
 - ・フランスは果たしてヒジュラの行き先となっているか
→現在（宗教的・社会的に）満足に生活できているのか、将来も現在と同じ場所で生活を続けたいか
 - ・社会統合に関して：宗教的・人種的な差別を受けたことはあるか、ある場合はどのように対応したか
 - ・アラビヤ語はどこで習っているか（子供がいる場合は、子供に関しても同様）

4. 今回のフィールドワークの成果

- ・人脈獲得：追加質問を送ることのできる環境の構築。
- ・インタビュー内容（フランス社会の現状）：
 - a. 社会統合について
→フランスに留まるか、それとも祖先の出身国に戻るか。もしくは行き来するという選択肢を選ぶのか：
「渡り鳥のように、人は食べ物を探しながら移動するもの」失業中のモハメド氏（44歳）
「イスラームに対する理解がないからこそ、ここでジルバーブ（訳者注：アラブ人男性が主に礼拝やフォーマルな場に出席する時に着る服）と帽子をかぶってダアワ（訳者注：イスラームを広める「招き」「布教」を意味するアラビヤ語の単語）を続ける」カーセム氏
→政策レベルでの対応：TRAMWAYとバスの交通網、2年前から始まったHLM（Habitation à loyer modéré、低家賃住宅）の解体と再建設により、移民の集中を防いで、ミックスが促進された。
 - b. アラビヤ語教育について
 - ・「きちんとやるには不十分。例えばここ、アル＝フダーモスクにあるようないくつかのアソシアシオンでアラビヤ語を教えていると知っているが、週に2～3時間では身につかない。今自分で教えているが、インテンシブな授業をモロッコで受けさせたいと思っている」12月9日アブドゥンヌール氏インタビューより
 - ・ターレク・ウーブルー氏もp. 50で「娘二人をモロッコに送りアラビヤ語を学ばせた」
 - ・ラバーハ氏による、メディナ大学のアラビヤ語オンライン授業の私塾のような活動。
 - c. マイノリティ法学について
30代以上は反対が目立ち、10代・20代は賛成が多数
 - ・「彼（ターレク・ウーブルー）はヒジャーブを取れと言っている。それは1400年続いたイスラームの歴史上ありえなかったことであり、許されない」「ターレクは哲学者だ」12月12日カーセム氏インタビューより
 - ・"Si une majorité d'auteurs classiques considère que la femme doit se cacher les cheveux - ainsi que les bras et les jambes -, il n'existe aucun texte univoque et incontestable obligeant cette dernière à le faire." p. 92, Tareq Oubrou
「主要な古典の著者は女性が髪—そして腕や脚も—を隠すべきだと考えているが、彼女たちがそうすることを明らかにかつ否定できない形で義務付けるテキストなど全くもって存在しない」p. 92
→学校に入る際のヒジャーブ着脱や給食の食事内容など、自分の力ではハラール（イスラームで「許され」ており「合法」とされているもの）を十分に担保できない状況に置かれた人々は、それを容認する傾向が強い
 - d. アソシアシオンについて
 - ・「UOIF (Union des organisations islamiques de France) はフランス全国にある400ものムスリムアソシアシオンを繋ぎ止めている。」Mahmoud Doua氏インタビューより
 - ・「UOIFはどこの国にも根っこを持たないという意味において、自由なイスラーム学の基盤となりうる」ターレク・ウーブルー氏
 - e. 文献の購入
 - ・"L'imam en colère (怒るイマーム)" Tareq Oubrou, 2012年11月
 - ・"L'Art d'être parent en Occident - Une perspective islamique (西洋で親になるということ—イスラーム的観点から—)" Ekram Beshir, Mohamed Rida Beshir, 2009年4月
 - ・"De l'idéologie islamique française, Eloge d'une insoumission à la modernité (フランスのイスラーム思想、現代性に対する不服従への称賛)" Aissam Ait-Yahya, 2013年5月

5. 今後の研究課題

- ・ボルドーだけでなく、他の地域においても同様の傾向が見られるのか
- ・「共和国モデル」を乗り越えるためのアソシアシオン（自発的結社・団体）は、ムスリムの社会統合にどれほど影響を与えているのか調査
- ・ホスト社会とムスリムの摩擦を解消する方策の検討

6. 終わりに

この度、森泰吉郎記念研究振興基金の研究者育成費をいただいたことで、有意義に研究を進めることができました。本当にありがとうございました。来年度の修論執筆に向けて、今年度得られた知見を活かし、より一層精進していきたく思います。

報告書は以上となります。お読みいただきありがとうございました。